

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370544

研究課題名(和文)動詞句の焦点化、話題化、削除と機能範疇との関係

研究課題名(英文)On the Relation between Focalization, Topicalization and Ellipsis of Verb Phrases and Functional Categories

研究代表者

石原 由貴 (Ishihara, Yuki)

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・教授

研究者番号：40242078

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、焦点化や話題化により、本来の位置とは異なる位置や形態で動詞句が生じる構文を研究対象とし、妥当な構造や派生を提案した。例えば「もうご飯、食べた?」「うん、食べた食べた」のような述語重複構文においては、述語が主節の高い位置にある機能範疇まで移動し、その位置と元位置の両方で発音されるために2度繰り返されることを示した。また、動詞句を焦点とする疑似分裂文や「暑い暑い暑いって」のような肯定否定強調構文についても検討を行った。

研究成果の概要(英文)：This research has investigated constructions in which Verb Phrases occur in positions different from the unmarked position or in forms different from the unmarked form, and proposed adequate structures and derivations for them. For example, in the predicate doubling construction where a predicate is repeated twice, it is argued that a predicate raises to a functional category in a high position in the clause and is pronounced there as well as in the position where it has originated. VP-focus pseudo-cleft sentences and the affirmative negative emphatic construction were also examined in this study.

研究分野：統語論

キーワード：動詞句 焦点 強調

1. 研究開始当初の背景

文法と音声システムとのインターフェイスや、文法と意味システムとのインターフェイスについての関心が高まる中、情報構造に関してもさまざまな研究が行われている。特に (pseudo-)cleft sentences ((疑似)分裂文) などに見られる focalization (焦点化) や、topicalization (話題化)、ellipsis (削除) などは、意味解釈と音声的具現が密接に関係しあうため、統語構造に関する知見のみならず、文法の枠組みについても重要な手がかりを与えてくれると考えられる。日本語の分裂文については Kizu (2005) や Hiraiwa and Ishihara (2012) 等の研究が行われており、Ishihara (2012a, b) が日本語の動詞句焦点疑似分裂文の特性を明らかにすることを目指す研究を開始している。また、Landau (2006, 2007) や Vicente (2009) 等、移動のコピー理論の観点から、話題化や焦点化の具現としての動詞(句)前置構文が研究されており、日本語に関しても Nishiyama and Cho (1998) を出発点にして Ishihara (2010) で行った研究をさらに進めたいと考え、本研究を開始した。

2. 研究の目的

動詞句が話題、焦点、旧情報等の談話上の機能を担う場合、統語的、形態論的にどのような形で具現化されるかを、普遍文法に関する原理とパラメーターによるアプローチに基づいて、詳細に検討することを目的として、本研究を行った。特に、動詞句前置文や動詞句を焦点とする疑似分裂文のように、動詞句が本来の位置とは異なる形や位置で具現化される場合にどのような形が許されるかを調査することにより、機能範疇を含む動詞句の構造や、談話の要請に基づく統語操作の特徴、機能範疇から切り離された動詞句に課せられる形態的・音韻的条件を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

動詞句の焦点化、話題化、削除に関する理論的、記述的先行研究を調査し、データを整理、分類すると同時に、自らもデータ収集を行った。それらを元にして、焦点化される要素や前置される要素の形態的、統語的特性を観察し、構造と派生がうまく説明できるような仮説の構築とその検証を行った。また、国内や海外の学会で発表し、他の研究者とも積極的に意見交換を行って、そのフィードバックを活かすように努めた。

4. 研究成果

(1) 「ねえ、昨日の講演会、行った?」「うん、行った行った」というような、述語を繰り返して強調を表す述語重複構文に関して調査

を行った。この構文は主節でしか生じないことから、Speas and Tenny (2003) 等にならない、主節の CP 領域に Speech Act Phrase という談話的な機能範疇の投射を仮定し、その主要部にある叙述マーカーが焦点素性を持つ時に、動詞の Speech Act への主要部移動が引き起こされると提案した。移動のコピー理論に基づき、この構文においては、移動先の Speech Act の位置と、動詞が元あった位置との2カ所で発音されることにより、述語の重複が起こるとした。本研究は、他の言語でも行われていた同様の分析が日本語でもほぼ当てはまることを示し、それによって、今も意見の分かれている日本語における動詞の顕在的な移動の証拠を提示することができたと考えている。

(2) 述語重複構文が極性疑問文の答えとして起こる場合の否定の生起について新たな観察を行った。「ねえ、学会、行ったの?」という肯定疑問文に対して、「?*うん、行かなかった行かなかった」と過去の否定形で答えるのは、「うん、行ってない行ってない/行かない行かない」と現在の否定形で答えるよりも容認度が下がる。一方で、「ねえ、学会行かなかったの?」という否定疑問文に答える場合には、「うん、行かなかった行かなかった」のように、過去の否定の繰り返し許容される。述語重複構文において過去の否定形が起こるのは、疑問に含まれる命題を肯定する場合に限られるということになる。このことを説明するために、Holmberg (2013) にならない、Polarity Phrase を TP の上に仮定し、日本語ではそれとは別に「ない」という否定辞が TP 内の NegP に起こるとし、極性の強調を表す述語重複構文においては Negではなく Pol が強調されるという分析を提示した。極性を強調する述語重複構文と、極性疑問文との相互作用を明らかにすることにより、疑問文の答えが省略により派生されているとする分析の有効性を示すことができた。

(3) 「太郎がしたのは学校へ行くことだ」のような動詞句を焦点とする日本語の疑似分裂構文について調査を行った。前提を表す「太郎がしたのは」という部分が単独で生じた場合に疑問文として解釈されることを指摘し、Ross (1972) らによる疑似分裂文を疑問文とその答えとしてとらえる分析を日本語のデータが支持することを示した。また、受け身や尊敬を表す形態素が前提部と焦点部の両方に繰り返して現れなければならないという事実を観察し、それが疑問文と省略を伴った答えとの間に見られる平行性の効果によるものであるとした。

(4) これまで生成文法の枠組みの中ではあまり取り上げられてこなかった「おいしいのいいしくないのって」という肯定否定強調構文を調査し、その特徴を記述することに努め

た。また、「?*おいしかったのおいしくなかったのって」のような過去形では容認度が落ちることを観察し、それが上述(2)の述語重複構文における過去の否定形の現れにくさと関連づけられることを示した。特に、「なかった」という否定の過去形が nak-at-ta のように「ある」の過去形を含んだ形に再分析されうることから、強調の素性の一致に課される局所性の条件に介在効果もたらされる可能性を示唆した。

(5)本研究では、話題化や強調の関わる述語重複構文、焦点化と削除の関わる疑似分裂構文、強調の関わる肯定否定強調構文という、動詞句が情報構造上、異なる働きを担う場合に起こるいくつかの構文に焦点を当て、その統語的、意味的特性を記述し、構造と派生を考察した。これらは、ある程度定型化されたものも含んだ有標の構文であるが、いずれも普遍文法の原理原則に従うことが確認された。このような周縁的な構文も理論上意味のある研究の対象となりうるため、文法化や構文文法といった研究も参照しながら、今後も記述面にとどまらず、普遍文法の観点からの研究を進めていきたいと考えている。

<引用文献>

- Hiraiwa, K. and S. Ishihara (2012) "Syntactic Metamorphosis: Clefts, Sluicing and In-Situ Focus in Japanese," *Syntax* 15.
- Holmberg, A. (2013) "The Syntax of Answers to Polar Questions in English and Swedish," *Lingua* 128.
- Ishihara, Y. (2010) "Non-Identical Verb Forms in the Japanese Predicate Doubling Construction," *Linguistic Research* 26.
- Ishihara, Y. (2012a) "On the Syntactic and Semantic Properties of VP Foci in Pseudocleft Sentences in Japanese," *Linguistic Research* 28.
- Ishihara, Y. (2012b) "The Structure and Derivation of VP Focus Pseudocleft Sentences in Japanese," *Linguistic Research* 28.
- Kizu, M. (2005) *Cleft Constructions in Japanese Syntax*, Palgrave.
- Landau, I. (2006) "Chain Resolution in Hebrew V(P)-fronting," *Syntax* 9.
- Landau, I. (2007) "Constraints on Partial VP-fronting," *Syntax* 10.
- Nishiyama, K. and E. Cho (1998) "Predicate Cleft Constructions in Japanese and Korean: The Role of Dummy Verbs in TP/VP Preposing," *JKL* 7.
- Ross, J. R. (1972) "Act," *Semantics of Natural Languages*, ed. by D. Davidson and G. Harman.
- Speas, M. and C. Tenny (2003) "Configurational Properties of Point of

View Roles," *Asymmetry in Grammar*, ed. by A. Disciullo.

Vicente, L. (2009) "An Alternative to Remnant Movement for Partial Predicate Fronting," *Syntax* 12.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

Yuki ISHIHARA (2018) "Tense Intervention Effect in Negative Emphasis: A Case Study in Japanese," *Proceedings of the Linguistic Society of America*, vol. 3, 1-8. DOI: <http://dx.doi.org/10.3765/plsa.v3i1.4336>. 査読なし。

Yuki ISHIHARA (2017) "VP-Focus Pseudocleft Sentences in Japanese: An Argument for Question-Answer Pair Analysis," *Proceedings of the Florida Linguistics Yearly Meetings (FLYM)*, vol. 3, 39-50. <http://journals.fcla.edu/floridalinguisticspapers/article/view/92471/88665>. 査読なし。

Yuki ISHIHARA (2015) "Negation in the Predicate Reduplication Construction in Japanese," *Linguistic Research: Working Papers in English Linguistics*, vol. 30, 1-21. 査読あり。

Yuki ISHIHARA (2014) "A Syntactic Analysis of Two Types of Predicate Reduplication in Japanese," *Extended Abstracts from of the Annual Meeting of the Linguistic Society of America*, vol. 5, 1-4. DOI: <http://dx.doi.org/10.3765/exabs.v0i0.2390>. 査読なし。

Yuki ISHIHARA (2013) "Verbal Reduplication for Polarity Emphasis in Japanese," *Linguistic Research: Working Papers in English Linguistics*, vol. 29, 31-58. 査読あり。

Yuki ISHIHARA (2013) "Nominalization in the Japanese Predicate Doubling Construction," *English Linguistics*, vol. 30, no. 1, 269-291. DOI: https://doi.org/10.9793/elsj.30.1_269 査読あり。

[学会発表](計 5 件)

Yuki ISHIHARA (2018) "Tense Intervention Effect in Negative Emphasis: A Case Study in Japanese," the 92nd Annual Meeting of the Linguistic Society of

America, Salt Lake City.

Yuki ISHIHARA (2016) “VP-Focus Pseudocleft Sentences in Japanese: An Argument for Question-Answer Pair Analysis,” the 3rd Florida Linguistics Yearly Meeting, Florida International University.

Yuki ISHIHARA (2016) “Voice-Matching Effect in Specificational Pseudocleft Sentences in Japanese,” the 8th Conference of the Formal Approaches to Japanese Linguistics, Mie University.

Yuki ISHIHARA (2014) “A Syntactic Analysis of Two Types of Predicate Reduplication in Japanese,” the 88th Annual Meeting of the Linguistic Society of America, Minneapolis.

石原由貴(2014)「日本語の述語繰り返し構文による極性の強調について」日本言語学会第149回大会、愛媛大学。

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石原 由貴 (ISHIHARA Yuki)
東京工業大学・リベラルアーツ研究教育
院・教授
研究者番号：40242078